派遣報告書

氏名　　太田　悠介
派遣先　　パリ第 8 大学
派遣期間　2010 年 7 月 1 日から 2011 年 6 月 13 日まで

派遣の概要および成果

報告者は 2009 年 9 月からパリ第 8 大学哲学科への留学を開始し、2010 年 7 月 1 日から 2011 年 6 月 13 日の期間に ITP-EUROPA プログラムからの支援を受け、フランスのマルクス主義哲学者エティエンヌ・バリバールの思想史研究を行ってきた。本年度は博士課程の二年目に該当するということで、昨年度と同様にパリ第 8 大学の指導教授であるアラン・ブロッサ教授が開催するセミナーや報告者の研究に関連する学外でのコロックおよびセミナーへ参加するとともに、博士論文の方向性を明確化することに重きをおいて自宅での作業に多くの時間を割くように努めた。

具体的には、「大衆（masses）」の問題系を中心に据えることで、バリバールおよびその周辺の思想家たちの思想的な布置を把握することを目指した。バリバールの思想的歩みからは、カール・マルクスに由来する「階級（classes）」概念を社会事象の唯一の排他的な説明原理とはせずに、これを「大衆消費社会」の成立や労働者階級を中心としたナショナリズムと人種主義の高まりなど、同時代の歴史的・社会的な変容に即して練り直そうとする一貫した態度があることがうかがわれる。報告者はこの試みが「階級」概念より広範な人間集団を指す「大衆」概念を中心として行われていると考え、バリバールの思想を論じるにあたって「大衆」の問題系を主題とした。

以上のような見通しのもとに、12月にボローニャで開催されたボローニャ大学および東京外国語大学共催のシンポジウムでは、「 *Écrire pour les masses. Réflexions sur le parcours intellectuel d'un penseur marxiste Étienne Balibar*（大衆のために書く――マルクス主義思想家エティエンヌ・バリバールの知的道程に関する考察）」と題する口頭発表を行った。この発表では上記の「大衆」の問題系を手がかりとして、バリバールの知的道程を包括的に論じた。また、今回の派遣期間中には、訳書『民主主義は、いま？――不可能な問いへの8つの思想的介入』（第1章と第7章を担当）および『北京のアダム・スミス――21世紀の諸系譜』（第6章を担当）が出版された。

今後の課題

2011 年 7 月 4 日から始まる 2011 年度 ITP-EUROPA プログラムの下での留学では、上記の成果を踏まえて博士論文の執筆を進める。またこれと並行して、本研究の成果を国内外問わず論文や口頭発表などのかたちで積極的に公表するつもりである。短期的な目標としては、9 月上旬にポルトガルのポルトで開催される国際学会において、バリバールとバリバールの師としてもっとも影響を与えたルイ・アルチュセールとの系譜関係を検討する口頭発表を行い、博士論文の主題の一層の明確化を目指す予定である。